

花の色はうつりにけりな
いたづらに

我が身世にふる
ながめせしまに

(小野小町…古今集)

九【現代語訳】

花の色は衰えて、色あせてしまった。春の長雨が降り続き、私は世を
過ごすための空しい（むなしい）心づかいかまけて、花をみる余裕
もなかった、そのあいだに。



【隠された意味】

『古今集』の編纂方針からすると、字句通りに解釈すべき歌というのが一番説得力があります。

別紙参照

ちはやぶる神代も聞かずたつたがわ

からくれなるに水くくるとは

(在原業平…古今集)

十七【現代語訳】

とにかく不思議なことが多かったかみよ、こんなことは聞いたことがない。まさに龍田川は、紅鮮やかな唐錦そのもの、その下を水がくぐるなんて。

【背景】 「屏風歌」といって、屏風に描かれた絵のわきに和歌をつけたもの。

『古今集』の詞書には「二条の後の東宮の御息所と申しける時に、御屏風に竜田川に紅葉流れたる形を描けりけるを題にてよめる」とあります。



人はいさ心も知らずふるさとは

花ぞ昔の 香ににほひける

(紀貫之…古今集)

三十五【現代語訳】

げんだいごやく

そうはおっしゃいますが、さあ 本当はどんなものか、お心のうちは

よくわかりません。けれども、この家の梅は、私を疎遠にもしないで、

昔ながらに美しく薫っています。

【隠された意味】

この宿の主人は女性で作者の恋人。しばらくお見限りだったことへの恨み言を言ったことに対する切り替

えしだったのだろうと、穿った見方をしている解説もあります。



恋すてふ 我が名はまだき 立ちにけり

人知れずこそ 思ひそめしか

みぶのただみ

(壬生忠見…拾遺集)

四十一【現代語訳】

恋こいをしているという私わたしの噂うわさが早くも立たってしまいました。人知れず、

ひそかに思おもい始はじめていたのに。

【背景】平安時代の中でも最も華やいた時代。

この歌は、歌合うたあわせせという歌の優劣ゆうれつを競きそう試合しあいで、四十番歌よんじゆうばんかにある平兼盛たいらかねもりの「忍ぶれど色いろに出いでにけりわが恋こいは 物ものや思おもふと人ひとのとふまで」と競きそい合あった歌うたです。軍配ぐんぱいは、平兼盛たいらかねもりに上あがり、壬生忠見みぶのただみは傷心しょうしんのあまり病びょうになつてなくなつてしまつたそうです。



契りきな かたみに袖を しぼりつつ

すゑの松山 波こさじとは

きよはらのもとすけ

(清原元輔…後拾遺集)

四十二【現代語訳】げんだいごやく 私たちは固く約束しましたよね。かたくやくそく お互いに袖を涙で濡らしながら。おたがい そで なみだ あの末の松山を波すえ まつやま なみ が決して超えることがないように、わたしたち あい か 私たちの愛も変わることがないと。

【背景】末の松山は、今の宮城県多賀城市にある丘。みやぎけんたがじょうし 東日本大震災は「貞観地震以来の大津波」と言わ

れましたが、869年の貞観地震は、この歌が詠まれる少し前に起こりました。じょうがんじしん

貞観地震による大津波でも、この末の松山を波を超えることがなかったという

言い伝えがあり、それを踏まえて「末の松山波こさじとは」とうたわれています。



山郡ふこと

